

より身近な税金のために

学校法人明星学園中学校 9年 高橋 七彩

日本の税金は約五十種類存在するそうです。そのうち、私が知っている税金はほんの数種類しかありませんでした。また、私たちが納めた税金は、年金、医療、福祉、教育など、普段の生活の中で大変深く関わりを持っていることがわかりました。

税金とは、投票権を持つ国民が選んだ代表者によって、平等で安全な暮らしを実現するために使われる財源のことです。例えば税金がなければ交番やごみの収集が有料になり、救急車を呼ぶことにもお金がかかってしまいます。また、平等に教育を受けることもできなくなってしまいます。これは大きなくくりで言えば、国という一つの会社を運営するために必要な大きな財源ということになります。それは、税金を納めることによって、私たちの日々の暮らしや安全を守ってもらうという約束事であり、同時に平等で平和な国づくりへの国民の義務でもあります。

以上のことに確信を持つ反面、それではなぜ国民の中に税金の負担を重く感じている人が少なからず存在するのでしょうか。消費税反対などと言葉で言うのは簡単ですが、少子高齢化や公債金の負担が増える中、具体的な解決案を考えていく必要があることは、政治家ならずとも私たち国民も認識しているはずで

す。そこで私が考えた理由として、納めた税金の恩恵を受けているという実感がないという点を挙げます。日常の中で当たり前を受けているサービス、例えば病気になった時に病院で診てもらえることや、整備された道路を安全に歩けることなど、これらは税金を納めて使うというシステムが機能しているからこそ得られるものです。しかし、それらを実感するためには学びの場が必要となります。

私自身も今回税金について調べてみたことで、学ぶことがたくさんありました。もっと早く税金について知りたかった、という思いが、正直な感想です。例えば小さい頃に税金についての学びの場があり、私たちの暮らしの中には税金が必要なんだという考えが根付いていることで、より身近に税金の恩恵と必要性を感じる生活を送れたように感じます。

日本は、子どもの前ではお金の話はしないなどの間違っ

た考えが根強く残っています。そのような考えによって欧米諸国に比べ、金融教育が遅れていることも税金のしくみを知る機会を減らしている要因だと思います。子どものうちからお金の流れを学ぶことで、世の中のしくみが健全にまわっているかを判断できるセンスを養えるのではないのでしょうか。そして、子どものうちから学び関わることで、納税者として税金の使い道に関心を持つ土台作りになっていくように思います。

私はまだ中学生ですが、「税についての作文」をきっかけに、いつか社会に出て働くようになった時に、無関心ではなく自発的な立場で税金を納めたいと思いました。